

特集 角膜真菌症アップデート**序 論**

雑賀司珠也*

一般臨床眼科医にとって、角膜真菌症は「一筋縄ではいかない」疾患であるという認識は、「当たらずとも遠からず」といったところと感じられます。初期診断に苦慮する症例の存在、局所投与について保険収載された治療薬が限られていること、糸状菌型、酵母菌型によっても薬剤感受性が大きく異なること、治療が後手に回ると高度の視力障害を残すこと、などが挙げられるのではないのでしょうか。

本年、『日本眼科学会雑誌』（以下、日眼会誌）に「真菌性角膜炎に関する多施設共同前向き観察研究」と題した論文が2編掲載されました。我々、眼科医にとって極めて有意義かつ貴重な情報が提供されています。この前向き研究の背景となった

「アップデート」の情報を整理することが本特集の目的のひとつです。これまでのわが国での角膜真菌症に対する医療の歴史をお読みいただいたことは、最新の前向き研究成果の歴史的位置づけに役立つと思います。また、治療薬が効果を発揮する原理の理解や、糸状菌型と酵母菌型の病型、治療経過の違いや、同じく細菌を標的とした抗菌薬が無効であるアカントアメーバによる角膜感染の情報も上述の日眼会誌の論文の理解を大きく助けてくれると思います。

ぜひ、日眼会誌の「真菌性角膜炎に関する多施設共同前向き観察研究」の論文2編と本特集をセットとして、角膜真菌症の臨床現場でのバイブルとしていただければ、特集编者としてこの上ない喜びです。

*Shizuya SAIKA 和歌山県立医科大学眼科学教室